

平成二十七年年度

総会・講演会の開催

六月十九日、安曇川公民館において、百二十四名の出席を得て開催されました。(委任状九十四名)

平成二十六年年度の事業報告・会計報告並びに会計監査報告が承認され、続いて二十七年年度事業計画・活動予算が報告されました。主な活動予定は次の通りです。

今年度の主な活動予定

● 藤樹先生映画会 (三月)

● 今津・朽木

● 藤樹賞の選考と表彰

● 論語指導教室 (随時)

● 教材の研究・開発

● 紙芝居による啓発推進

● 学習会 (藤樹先生に親しむ会) 毎月第一日曜日

● 学習会 (藤樹人間学習会) 毎月第一土曜日

● 会報「高島藤樹会」の発行 (年三回)

● 「高島藤樹会」のホームページ更新 (随時)

● 「中江藤樹DVD」等の販売

● 大洲祭りが高島市物産の販売 (事務局)

高島藤樹会活動の紹介

講演会

「吉田松陰のしんじん」

徳丸 和枝

一六四八年藤樹先生が亡くなられた(三代家光の頃)後、百八十年余を経て(十一代將軍家斉の頃)吉田松陰は生まれています。

藤樹全集(岩波書店)に劣らぬ山口県教育委員会編の膨大な松陰全集。そこには「徳を成し材を達するには師恩友益多きに居る」(士規七則)など松陰の名言がまつまっています。今年の大河ドラマを機に、年譜を辿りながら人物の一面をみていきたいと思います。

吉田松陰は五歳で山鹿流兵学を家学とする吉田家に養子に入り、十一歳には藩主毛利慶親に君前講義をするほどの神童ぶりを発揮しています。



十五歳で山鹿流兵学師範として独立し、家学の継承者の道を進んでおりました。

ところが、二十歳を過ぎ、長州松本村から九州・東北・江戸と遊歴の旅を続ける中で、幕末思想家へと変遷していきます。

江戸で佐久間象山から西洋兵学を学びながら藩の許可書を持たず東北遊歴に出発したのが最初の暴走の始まりです。それは江戸藩邸から出奔の形となり、脱藩の罪により浪人となるも藩主に幕府批判の意見書提出、あるいは、黒船来航を目にする「衷情をうかがう」とばかりにアメリカ力密航を企てたり、一見暴走とも思える過激な行動ゆえ野山獄に投げられます。しかし獄中であつても怯まず、入獄一年二か月の間に六一八冊を読破し、孟子講義を行うなど、それは獄中の住人や番人をも虜にして、二十八歳で杉家に戻ってから、松下村塾主宰に至ります。

松陰の「仁政」に対するエネルギーは、京都で安政の大獄の指揮をとっていた老中間部詮勝の暗殺計画にまで及び、結果的にはそれが因で斬首となるのですが、この短い二年余の松下村塾が何故に、後世にまで名が残る塾となったのでしょうか。

幕末の私塾は大抵全国各地から選りすぐりの秀才達が師を求めて集まっていました。それに対し松下村塾は、近所に住むごく普通の少年、大半が十代で入門という異彩を放っています。その中学・高校生の年代

の門下生がのち長州藩の舵取りをしたり、明治維新の高級官僚になって活躍するのです。歴史上に名を留めた塾生の数が多いのも突出しています。

松陰の我が身の危険を承知で行動する血気にはやつた行動も、若い門下生にとっては武勇伝や英雄のように映ったのでしょうか。少なくとも指導者の熱い思いが少年達の魂に火をつけた事は揺るぎない事実のように思えます。

松陰像については時代によって評価が問われます。過激、狂気、松陰流の「仁政」の為ならば、人を誅める事も正義というテロリスト的な危険な一面、また、松陰死後国賊扱いにもかわからず門人達は連名を以て先生の石碑を刻む程に仰がれる私心なきリーダーの一面「至誠にして動かざる者は未だこれ有らざるなり」(孟子)は、松陰語として現代でも奮起をうながす言葉として使われているのを目にします。

「慈母の愛も振り切らなければ国家の大事はできない」と門下生に叱咤してきた松陰ですが、処刑前夜に親に送られた辞世の句「親思うころにまさる親ごころけふの音づれ何ときくらん」を詠むと、この時になつてようやく孝の思想を思い起こされ落ち着かれたと思うに至りません。